

# イギリスの生き物とともに

網 代 敦

この4月(2003年)から1年間イギリスで海外研修をすることになった。ちょうど今号の論叢はピーター・ラビットの特集号であるという。そこで4月から10月までの半年あまりの生活の中で、イギリスの身近な自然と人との触れ合いについて、取り留めのない雑文を寄せることにした。ラビットの世界と密接な接点はあまりない。タイトルからも脱線し過ぎたところがある。その点を考慮して頂ければ幸いである。

## 身近なところで

10月になった。昼食後、借りた家のとても気に入っている庭をのんびり眺めながらのときである。どこに抜け道があるのか分らない。左隣のカンデイさんとの境のフェンス下の茂みの中から、ひょっこりキツネが現れた。芝生の中央までのそのそやって来て、反対側の茂みに顔を突っ込むと、また後戻りをし、途中で立ち止まってゆっくりこちらに顔を向け、座り込んで後ろ足で顎を掻き始めた。すると、奥の方からもう一匹キツネが姿を見せた。こちらの方がやや俊敏だ。勢いよく横切ったかと思うと、さっと身を翻して大きな木の根元で足を止めた。しばらくその木の下でじゃれ合っていたが、一匹は灌木の中に消え、もう一匹は巣穴

にもぐりこんだ。ちょっとした感動である。(実はこの文章を書いている今も、キツネが秋の日向ぼっこをするために顔を出した。ちゃんと書いてくれよと言わんばかりに、また顎を搔いている)

オックスフォードの北に一年間住む家を見つけた。この家に決めたのは、庭の奥中央に一本どっしりとした大木が立ち、のびのびと枝を大きく広げていたのに惹かれたからだ。私の好きな中世の英語英文学者のJ.R.R.トルキーン(1892-1973)も大木が好きであった。その大木に寄りかかって思案するトルキーンの写真を見たのが、始めて『指輪物語』の作者との出会いであった。それだけにこの大木とトルキーンが重なり合って、ここにしようと思ったのである。たまたまこの家のすぐ近くにウルバーコート・セメタリという共同墓地があって、そこにトルキーンが埋葬されていることも知り、いよいよ嬉しくなった。さらに話はわき道にそれるが、私が所属させていただいているカトリックのイエズス会のチャンピオン・ホールというコレッジのマスターがトルキーンにとてもよく似ている。トルキーンもカトリック信者である。いろいろ結び合う要素が重なってとても幸運を感じている。「庭でキツネの尻尾を見た」と子供が言ってはいたが、半信半疑であった。生い茂っていた夏草が枯れたところに、この大木の後方に何か動物が掘った穴を見つけた。実はこれがキツネの穴だったのである。

さてこの庭では春からいろいろな小動物に出会うことができた。ここに来た当初に目にしたのは、ようやくイギリスに春がやって来たものの、その肌寒いこともあって、雑草の中に鈍い動作で身を隠していた蛙であった。よく見てみると2匹、3匹と棲みついていた。もう少し暖かくなると、近くの湖に足を伸ばそうとして、哀れ車に轆かれてしまったものを家の前の道路で数多く見た。蛙と言えども一つ、もとの姿をとどめた干からびた蛙の死骸を見つけ、門先にお守りとして飾っておい

た。なぜか、出かけるときも帰宅のときも、この蛙の顔を見るとほっとした気持ちになったものである。今は、右隣の腕白ジョサイアがいつの間にか持って行って、姿を消した。4月、先の大きな木の下は紫の花でいっぱいになった。それは、それはきれいである。この花の中を、見え隠れし飛び跳ねているものがある。何だろうと思って目を凝らして見ると、リスであった。「リスだ」と言ってこれまた感動した。つがいであろうか、2匹のリスはこの木の幹をよじ登り、太い枝にちょこんと座り尻尾をくるりとまるめて、しばしうたた寝をしているような仕草が続いた。その後、あっという間に枝から枝へ飛び移り、隣の庭に駆け込んで行った。このリスたちはよく顔を出してくれる。「今日はリスが出た?」と聞くのが日課となってしまったくらいだ。9月、木の実をかじっているのを見た。そして口にくわえ、庭のあちこちにその実を埋めている。窓先の花の鉢の中にわざわざ埋めにも来た。留守中に植木鉢をひっくり返した犯人はこれで判った。リスはこちらでは、ちょっとした害獣であると聞いた。それでも車にはねられ死んでいるのを見ると、心が痛くなる。先日もお隣の入り口前の歩道にリスが死んでいた。口から液を吐いていたが、これといった外傷は見られなかった。恐らくこれも車にはねられたのだろう。尻尾まで伸ばすと、体長はかなりあって大きいものだ。花壇にそっと埋めてやった。最近は大木の周りを2匹がぐるぐる追いかけてっこをしている光景がよく見られる。帰宅途中、木の実を拾ってきては庭に撒いておくと、翌日には必ずなくなっている。きっとまたどこかに埋めたのだろう。しかし、埋めた場所を忘れることもよくあるそうだ。

愛くるしいのはロビンである。英文学に触れれば必ずどこかで耳にする名前だ。イギリスの国鳥である。顔から胸にかけてオレンジ色をしたこの鳥は本当に人懐っこい。すぐそばにやって来ては逃げる様子もな

く、ちょこちょこ付いてまわる。外でサンドウイッチを広げれば真っ先に飛んでくるのはこの鳥である。イギリス人に愛される訳もよく理解できた。鳴き声がきれいだと聞いてはいたものの、実際に耳にする機会にはなかなか恵まれなかった。「イギリスにようこそ」と美しい声で朝夕に歌ってくれたときは、本当に嬉しかった。次もよく見かける鳥だ。雄は全身真っ黒で、嘴は黄色、目の周りに赤いリング。英語で複合語とはどういうものかを説明するときに、必ず引き合いに出す名前の鳥。ただし今までは、“blackbird”という単に文字と音声だけの世界の中でしか認識できなかった。そのブラックバードは、庭でもそここのフィールドでも、何度も目に飛び込んで来る足の速い鳥だ。この鳥を見かけると、複合語が走っているといつもってしまうのである。5月の末頃にシラコバトがダイニングルームの前の二股の木に巣をかけた。猫がいたら、いとも簡単に登ってしまうようなところである。しかし木の葉の陰に隠れて、微妙な角度で巣は視覚からはずされている。しかも犬はたくさん見かけるが、猫の姿はほとんど見ない。だから安心してた。このハトは後ろの首周りに黒い線があるのが特徴で、襟のあるハト (collared dove) と呼ばれている。ちょうど雛が孵ったかなと思った頃、巣に親鳥の気配がなくなってしまった。巣の下を見ると、卵の殻と巣の素材の枯れ枝が落ちていた。何かに襲われたようだ。日本でもキジバトのこのような光景を見るのはいつものことなので、イギリスでもそうかと思うとハトの哀れを感じざるを得ない。数日後も、道路わきの木の下に、むしり取られたハトの羽が落ちているのを目にした。ちょうど犬を散歩させていた男性がそれを見て、おやと思い木の上を見上げていた姿が印象的であった。

今度は庭から外へ出てみよう。オックスフォードの学生の典型的なカラーは、白と黒である。白いワイシャツと、黒いズボンに、そして黒の

ガウンである。もっとも普段はジーンズ姿がほとんどである。大人の男女に関しては、ここでは一般に黒の服装が好まれている。この色がオックスフォードの人の基調であるかどうかは分からないが、この二色を見事に着こなしているのがマグパイだ。しかも黒い凸尾の長い尾羽が黒いガウンのテイルに似ている。姿はなかなか優雅であるが、この鳥は悪食である。路上で轢かれた仲間の死骸も、飛ばしてくる車と車の間隙を縫って突っついていくくらいだからだ。パブでは外のテーブルに人がいなくなると、一つ一つを飛び回って食べ残されたチップスがないかと漁っている。次はキジだ。イギリスでは“korr-kok”と鳴き、日本では「けーん、けーん」と鳴く。日本ではかつて身近な雑木林や野原に行けば普通に見られたキジが、今では生息場所を奪われ目にすることは難しくなった。しかし、ここではよく見かける。オックスフォードの北、ウッドストックという町にあるウィンストン・チャーチルが生まれたブレンナム宮殿に行くと、その広大な敷地の中をあちこち優雅に歩いていた。またジャガイモ畑の収穫後の土だけとなった耕作地にも、5、6羽が共に並んでいた。キジはこちらでは食卓に上る。中英語の詩の中で読んだことがあるが、中世の時代にも宮廷のメニューにキジ料理が現れる。一度キジのパイを食べてみたが、あの姿を思い出すと少々気が引けてしまった。味の方は淡白だったような気がするが、はっきり覚えていない。

今年のイギリスは例年になく好天気の日が多い。今夏ヨーロッパは猛暑であり、ここも夏は30度を越える日が数日続いた。エアコンのない図書館は、さすがに暑くしばらく遠ざかったが、日本ほどの高温多湿の陽気ではないので、夏は快適に過ごすことができた。その日も天気は好く青空が広がり、視界が開けた典型的なイギリスの風景の中、ウッドストックの町から自転車で帰る途中で見た光景のことである。この町には古本屋が一軒ある。そこでウィリアム・ワーズワース (1770-1850) の

詩集、*The Prelude* のクラレンドン版を手に入れた。リュックに詰め、「ワーズワースを背負って」と題して詩でも書ける才能があればなあと、取り留めのないことを考えながら遠い景色を眺めていた。「今日の青空も最高だ」と独り言を言いながらふと空を見上げると、ゆったり旋回している鳥が目に入った。それほど大きくはない。チョウゲンボウだと思った。獲物はネズミか小鳥だろうか。それともピーター・ラビットの仲間たちだったかもしれない。いずれにせよ円を描く様が優雅でうっとりしてしまった。そのときのチョウゲンボウの頭の中に「ワーズワースを見下ろして」とでもあったとしたら、いかにもオックスフォードのチョウゲンボウだ。タカ類にはもう一種類出くわした。オックスフォードの南南西に位置し、ナショナル・トラストが管理している白馬の丘 (White Horse Hill) というところに出かけた。ここには、石灰質の丘陵に描かれた馬の絵 (3000年以上前) が残されている。見晴らしがよく、周りの起伏の富んだ丘陵の様が絵に描いたようである。その丘陵の間の空中にじっと静止して羽ばたき続けている鳥が見えた。双眼鏡が手元になかったのではっきりした種類は分らない。ただ、この飛び方から思い出したのが、イギリスが開発した垂直離着陸型のハリアーという戦闘機だ。ハリアー (harrier) とはチュウヒ・タカ類のことを指す。静止した飛び方が何とも芸術的であった。今回は、「ハリアーを見下ろして」ということになった。カワセミはオックスフォードを流れるテムズ川で何度となく見かけた。この鳥は日本の多摩川でもよく目にできるお馴染みの鳥である。スイスイと川面ぎりぎりのところを低空で飛んでいく。もっとも人によっては容易に見られる鳥ではないが、私にとってはお馴染みの鳥で、懐かしい感じがした。

## “Be careful!”

キジ、マグパイ、カラス、キツネ、ハリネズミ、リス、ハナグマ、シカ、そして一番はノウサギ。ただし今まで犬猫は見たことはない。これは車を運転していて路上で見かけた動物の死骸のリストである。田園風景の中、景色を見ながらゆっくり車を走らせていると、バックミラーにすぐに後ろから迫ってくる車が見える。そうなるとおちおち車外の景色も見ていられない。何台も後方の車を先にやってもすぐにお団子の後続車の列ができてしまう。もっとゆっくり走って田舎道を楽しんだらどうかかなあと思うのはこちらの勝手らしい。もっともどこに行っても町中を通り越せば、面前に広がるのは右も左も牧草地や丘陵地帯なので、イギリス人にとっては何も特別な景色ではない。それにしても、車のそのスピードたるや相当なものである。これでは動物はよけ切れない。自分の車だけでもぶつからないようにと願うばかりである。もっとも悲惨だったのは、コッツウォルズに出かける途中の路上で、雌鹿が轢かれて路面が真っ赤に染まっていた光景だった。息絶えていたがこれ以上車に轢かれるのは忍びなく路上から脇に移動しようと思ったものの、後からスピードを出してくる車にこちらも巻き込まれてしまいそうで何もできず仕舞いだった。一番の被害者はピーター・ラビットの仲間のノウサギである。彼らは道路脇のすぐそばまで出てきてしまうことが多いらしい。ラウンドアバウトの中の花壇にも棲みついているくらいなので、危険極まりない。ただし、オックスフォードのポート・メドウを流れるテムズ川沿いのフットパスのあちこちで見かけたノウサギは、安全地帯の中にあり、安心して見ていられた。茂みの根元にいくつもの穴が縦横無尽といってもいいくらいに掘られていた。6月、子ウサギが何匹も寄り添って顔を見せてくれた。用心深く、近寄ると灌木の中に身を隠してしまう

が、何とも微笑ましいものだ。

## 犬に寛容

イギリス人と言えば犬。これに関してはいろいろなエッセイが書かれているので、ここで屋上屋を重ねるようなことをするつもりはない。一つだけ書きたいことがあるだけだ。その前にいつも疑問に思っていることだが、これほど犬が好きなイギリス人なのに、犬に関する英語の慣用表現には悪いイメージのものが多のはなぜだろうか。『ランダムハウス英語辞典』（第二版：小学館，1994）の“dog”の項目から次のようなものを拾い出してみることができる。

*a dead dog* 何の役にも立たない人 [もの] .

*a dog in the blanket* 意地悪な人間 .

*a dog in the manger* (自分で使いもせず必要でもない物を他人に使わせないために押さえているような) 利己的で意地の悪い人, ひねくれ者.

▶ 飼い葉桶 (おけ) に入り込んで牛がまぐさを食べることを邪魔したイソップ物語の犬の話から .

(as) *sick as a dog* ひどく気分が悪い .

*die like a dog/die a dog's death* 惨めな死に方をする .

*dressed [or done] up like a dog's dinner* 《英話 / 軽蔑的》(人目を引こうと) いやに派手に着飾って .

*go to the dogs* 《話》 道徳的 [身体的] に駄目になる, 墮落する; 破滅する, うらぶれる .

*I have to see a man about a dog.* 《話》 ちょっと用事がある, ちょっとそこまで .



▶ 欠席・中座する際の言いわけや、行先についての質問をかわす場合に用いる。

*lead a dog's life* 惨めな生活をする。

*not have a dog's chance* ほとんど見込みがない。

*That dog doesn't [or won't] hunt.* 《話》そんなことは信じられない、それは無理だ。

*the dogs of war* 戦争の惨禍 . cf. *Shak.Caes.III.i.273.*

*throw [or give] to the dogs* (価値のないものとして) 投げ捨てる。

*try it on the dog* 犬に食わせてみる、毒味させる；劣っていたり重要でない人[もの]だけが損害をこうむるような試し方をする。

*work like a dog* 《話》あくせく [がむしゃらに] 働く。

この中で、*I have to see a man about a dog.* という表現こそ、犬との密接な生活から生み出された面白い言い方である。ともあれ、犬の散歩はあちこちで見受けられる。犬の躰はしっかりしている。決して人に対して吠えることをしない。各家からも犬の吠え声が聞こえることはまずない。スーパーマーケットの入り口で、飼い主が買い物を終わるまで行儀よく待っている。が、一つだけ迷惑なことは、これらお行儀の良い犬の排泄物である。歩道、公園、そして特にひどいのはフィールドの芝生の上に延々と続くこれらの忘れ物には閉口する。ところどころに、「排泄物入れ」が設けられているが、きちんと処理している人を見かけることはめったにない。ましてや、“Dogs must not foul footway or verge.” などという掲示などはあつて無きに等しい。フィールドにはたくさんの方が集まってくる。フットボールの練習・試合にやって来る子供たち、ボール蹴りに興じる大人たち、仲良く手をつないで散歩している老夫婦、寝そべって日光浴を楽しむ若者、そしてもちろん家族連れ。気にすること

はあまりないのだろうか。どうやらイギリス人は犬の排泄物には寛容であるらしい。しかしながら、衛生上の責任は誰が取るのであろうか。それは、「犬に関する悪いイメージを英語表現の中に押し込めることによって免除されるものとする」というふうに自分は解釈した。我が家の近くにあるフィールドの入り口に、ちょっと前にこのような警告板が立った。“In the interest of hygiene do not allow dogs to foul this sport area.”

## 樹齢は何年？

家がある所在地名はFive Mile Driveというまるで脚韻を踏んだような名前のところである。地名と書いたが実際は道の名前で、片側の番地は偶数番号、反対側の番地は奇数番号となっている。どの家にも表札などはない。イギリスの番地表示はどこもこの方法らしい。イギリスで住所を知るには、ポストコードとこの道の名前が大切である。この表示法は本当に合理的で、道の名前さえ分れば地図を読むのに苦労はしない。さて、このFive Mile Driveの道は、春先には桜が咲いてきれいな並木道となった。ぐんと伸びた赤松や、幹の太いカエデなどが植えられており雰囲気の良い並木道である。こちらの人は木に関しては、日本のような手入れを施すことはない。ある程度ぼうぼうと生い茂ると、チェーンソーみたいなものでぼさり刈り込んでしまう。だから、木の枝を剪定して透かすことなどはしない。強い風が吹くと、かなり枝が折れ落ちてくる。6月にカエデの大きな枝が折れ、歩道を通せんぼしていたこともあった。9月末、帰宅するためにFive Mile Driveに入ると、急に視界が開けていた。何本かの大きな桜やカエデが切り倒されてなくなっていたからである。家の前に着くと、ここにもあった大きな太い桜の姿がなくなっていた。隣のキャンディさんも、「あの枝振りがとても気に入って

いたのに」と残念がっていた。自分の感覚から言えば、木は古木になればなるほど大切にされるべきものと思っている。むしろ、それには枝の剪定がある程度は必要であろう。そうして太く大きく育てていく。

こんなに太くなった桜やカエデがいとも簡単に切られてしまうとは思ったものの、それには事情があった。カエデは「うろ」ができやすく、そうなるとうろやすい。近年、オックスフォードで倒れてきた太い木に車ごと押しつぶされて、女性が死亡するという悲しい事故があったそうだ。それ以来、オックスフォード・カウンシルは神経質になり、太い木の調査を始め少しでも「うろ」などがある場合は切り倒す方針を採ることになったらしい。家人によれば、家の前の桜の切り倒しは次のようであった。屈強の男性が10名ほどぞろぞろやって来たかと思うと、歩道側に倒れるように幹にチェーンソーで三角の切れ込みを入れ、一気に引き倒したとのこと。先に枝打ちなどはしなかったそうで、なんとも豪快だったようだ。おかげで、倒れた瞬間、ぶあっという感じで葉っぱが大量に玄関先に舞い込んで来たとも話していた。日本と異なり、緑豊かで樹木も多いことからすればこれぐらいのことはたいしたことではないのであろう。「道路拡張による、樹齢数百年の木の切り倒しに反対の署名を」との声があちこちで聞かれる日本の状況は悲しい限りである。緑の豊かさは、もちろん日本の国土との地形上の違いによるところ大であるが、都市部の緑の広がりや素晴らしさにも圧倒される。トルキーンの伝記 (Michael White, *Tolkien: A Biography*, Abacus, 2002) を読んでいたら、木のことに関するエピソードに出会ったので、ここの最後に引用しておこう。

One of Tolkien's neighbours in Northmoor Road, the elderly Lady Agnew met Tolkien on the pavement outside Number 20 and happened to mention

she was worried about a poplar tree outside her house. She had had it cut back and many of its branches lopped off and now she believed that it was a safety hazard, that it could fall onto her house in a storm. Tolkien, who had always loved trees, thought Lady Agnew was being ridiculous and gently persuaded her that the tree should stay, that the house would be swept away long before the tree could damage her property.

(pp. 180 - 181)

## アングリング

日本の華奢な振り出し竿が、イギリスの大物に耐えられるか。イギリスに来て是非一つやってみたかったことは、「釣り」であった。『釣魚大全』を著したアイザック・ウォルトンが埋葬されているウィンチェスターの大聖堂には何年か前に訪れ、その霊気を戴いてきた。道具は先の竿を二本と、最低限のものだけを持ってきた。*The Practical Fishing Encyclopaedia*なるものをマーケットの古本の店で買った。年間のロッド・ライセンスも手に入れた。あとは実践するのみと思いきや、すぐにそういう訳には行かなかった。イギリスでは釣りをする上でのロッド・ライセンス取得が厳しく取り決められている。そのライセンスはなぜか郵便局から購入することになっている。キドリングトンという町のアングリング・ショップ、プレデター (Predator: ちなみに「捕食動物」という意味。「他人を食い物にする人」というよからぬ意味もあり、始めてこの店に入るときは少し躊躇した) の人にいろいろ聞いたところ、ロッド・ライセンスを郵便局から買わなくてはならない理由は次のことによる。河川は政府の管轄で、河川を維持するための税金のようなものだからだ。釣竿を持ち運んでいるだけでも、このライセンスを提示でき

ないと罰せられるそうだ。毎年テムズ川では1000もの人がライセンス不所持で、罰金を受けている報告がある。自分の敷地の湖沼やそこを流れる河川でさえも、このライセンスが必要なんだよとこの人は教えてくれた。また所定場所ごとに各クラブが運営していて、そこのクラブから、入漁券を買わなくてはならない。河川も細かく区切られていて、それぞれのアングリング・ショップが個々のチケットを扱っているとのこと。なかなか面倒くさい。そこで、この店で安いリール竿を一本買ったついでに、Oxford District Angling Association (略してO.D.A.A.) という Angling Clubに入った。この会員証を持っていれば、所定の場所で自由に釣りができるからだ。会員証を受け取ったものの、これにもまたいろいろと規則があって、クリスマスマッチの前に催される他のマッチに一度は必ず参加することとか、いろいろある。いやはや、気楽に釣りをする訳にもいかないものだ。ついでながら、ロッド・ライセンスについても一言。これで竿が何本まで出せるか、また釣ってもいい魚種は何かという注意事項が、名前を記載した項目の下に次のように書かれてあった。

The angler described above, and no other, is authorised by this licence to fish with single rod and line for Non Migratory Trout (Brown and Rainbow) and Char or with up to two rods and line (where byelaws and rules permit) for Freshwater Fish (Coarse Fish) and Eels during the period covered by this licence in all waters within the area of the Environment Agency subject to the close seasons . . . .

しかし自由な範囲で、そして楽しめる範囲のなかで行動することにした。イギリスではどのような魚が釣れるのか、皆目見当がつかなかった。しかし先の*The Practical Fishing Encyclopaedia*で調べてみると、バーベル、ブリーム、カープ、キャットフィッシュ、チャブ、デイス、イー

ル、パーチ、パイク、ローチ、ラッド、テンチ、ザンダーと日本では見慣れない魚ばかりだった。ただしブリームとパイクの名前は知っていた。英詩の父、G. チョーサー (1343-1400) の『カンタベリー物語』のジェネラル・プロローグに登場する美食家のフランクリン (Franklin : 郷士) は、“He kept fat partridges in coops, beyond, / Many a bream and pike were in his pond.” (trans. by Neville Coghill, 1968) とあったからである。中世の時代の修道院のフィッシュ・ポンドには食用としてこれらの魚がしばし飼われていたことを、オックスフォードの西6マイルにある村、エンシャムの大修道院跡を訪れたときに知った。さて問題は餌であるが、プレデターの人は「絶対 worms か maggots だよ」と言う。もちろん前者は「ミミズ」のことと分ったが、maggots とは何ぞやと首を傾げていたら、こっちへ来いと言って、冷蔵庫をあけ大きな箱いっぱいのもぞもぞした虫を見せてくれた。赤や青や黄色の虫である。よくよく見ると「蛆虫」であった。日本でも餌にする虫であるが、こうも大量の色つきのものを見せられたので、「うー」と絶句してしまった。今回は練り餌 (paste) で我慢した。釣り場のポート・メドウを流れるテムズ川に繰り出した。小さなチャブが数匹釣れただけで、釣果は一向に上がらない。近くで釣りをしていた15, 6歳の4人組の男の子たちが、何か釣れたかと聞きにやって来た。人の釣果が気になるのは洋の東西を問わずどこも同じだ。一人の子が、「餌は何を使っているか」と聞いてきてこれではだめだと言って、一掴み maggots を持って来た。ついでにこちらの仕掛けを直してくれた。そのおかげで中ぐらいのパーチが釣れた。この魚は肉食性で口が大きい。はっきりした黒い縦のストライプが黄色味を帯びたうろこの膚に6本ほど入っている。背びれのとげは鋭く痛い。胸びれと尾びれはエンジ色で鮮やかである。イギリスの川で即座に識別できる魚である。回を重ねるうちに、次第に大物のローチやパーチが釣れ出し

た。Maggotsの威力である。プレデターにはその後何回か、maggotsを買いに行った。色つきというのが面白かったので、写真に撮らせて欲しいと言ったら、店の人が“Me?”と聞き返し、maggotsを持ってにっこり笑ってポーズをとった。傑作の写真である。

10月、気候も肌寒くなり釣りもそろそろお仕舞いかなと思う頃であった。随分と暖かい一日となりそうなので、この日はwormsを持って出かけた。大きなローチが釣れたかと思うと、今度は40センチほどのテンチという鯉に似た魚が釣れた。子供がこれも大きなパーチを釣り上げた。皆が覗きに来たくらいにどちらも大きかった。軽装な道具でも十分釣れることがこれで証明できた訳だ。こちらの釣り人の道具は随分と大々的だ。荷物が多く、まるでゴルフ道具かなと思えるようなバッグを背負っている他に、いろいろ釣り道具が入った大きなキャリアーを引いて、メドウを歩いてやって来る。魚を入れるネットは長さが2メートルくらいもあり、ちょっと大げさではないのかなあと思うほどだ。浮きを眺めているのと、こちらの人の釣りの姿を見るのを楽しみながら1日が終わった。魚はすべてリリースした。さて、日本の華奢な振り出し竿が、イギリスの大物に耐えられたかということであるが、これはYesでもありNoでもある。一本の溪流竿は早々に折れてしまったからである。しかし手直しをして、その後は十分耐用できた。それからもう一つ。先のO.D.A.A.の会員証には、会員が釣ってもよい指定場所が書かれてある。その一つに、このような記述の場所がある。“Pixey Meadow Mill Stream seldom disappoints the visiting angler. The water responds to all types and styles of fishing. Good Shoals of Bream and Roach with chub, perch, and Pike.” ‘Shoals’, ‘seldom disappoints’, そして‘Pike’という語句が興味をそそった。パイクは是非ともイギリスで釣ってみたい魚だったからである。しかし、この川へのアクセスがどうしても見つからない。ここからは入れ

ればというところが一箇所あるのだが、そこはオックスフォード大学出版局 (OUP) のアングリング・クラブのプライベートな釣り場で、鉄の扉に鍵がかかっている。OUPの本には普段からご厄介になっているし、6月にはOxford University Press Museumを訪れ、係りの人が付きっきりで丁寧な説明をしてくれた。だから有難く思っているが、このことだけは許し難い。パイクはどうなったかと言うと、本物にはまだお目にかかっていない。しかし、イギリスに来て最初に自分のものとして買った物が、陶器でできたパイクの置物であった。ウィンドウから取り上げレジに持っていくと、店の人が皆で、「あー、このパイクねー」と残念そうに口を揃えた。何かと思えば、レジの女性の父親がこれを焼いたそうで、ついに売られて行くとなると、嬉しい反面寂しい気持ちでもあると話してくれた。気持ちのこもったパイクは1匹すでに釣り上げた。Maggotも wormsも必要なかった。

## 自然保護のこと

イギリス滞在中にナショナル・トラストの会員になろうと思った。そしてなるなら、湖水地方のヒル・トップと決めていた。そのヒル・トップに着いたのは7月23日、強い雨が降る中であつた。12時過ぎにウィンダミアの西を回ってニアソーリー周辺着。川が見えるところで、おにぎりの昼食。そして目的地でナショナル・トラストの家族会員になった。仮の会員証を発行してもらい、Membership Packを受け取った。正式の会員証は後日送られてくるので、その仮のもので早速ポターが住んだヒル・トップの家に入った。家は昔のままで、各部屋にはピーター・ラビットの舞台となったそれぞれの場面のページが開かれてあつた。こじんまりとした各部屋を回る。ポターの油絵が壁に掛かっていたが、な



かなかのものである。さてこのナショナル・トラストであるが、1895年、弁護士のリバート・ハンター卿、婦人社会活動家のオクタヴィア・ヒル、そして牧師であるハードウィック・ローンズリーの3人によって創設された。正式の英語の名称は、National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beautyである。歴史的に関心がある場所か、または自然の美しさを持つ景勝地を「国民」のために恒久的に保存することが目的の慈善団体である。湖水地方自身は、1899年43ヘクタールの土地がナショナル・トラストによって買い上げられた。その活動の概略を示せば、中世の時代から現代に至るまでの建築物(古代の碑・城・家屋)、庭園、景観の良い公園、産業にかかわった建造物などを保存すること、これまでに600マイルの海岸線と沿岸の土地をその保護下に入れ、多くの動植物の生息地を確保し、248,000ヘクタールの美しいカントリーサイドを守り、39,000以上の人々が毎年ボランティアとして自然保護とその再生のために活動している。

そのナショナル・トラストがイギリスでこれらの活動の頂点に立っている訳だが、その土地土地によって、独自の“Local Wildlife Trust”というものもある。フットパスを歩くと、所々に“Nature Reserve”という文字を掲げた表示板があり、そこは野生動物の保護区を示している。ここでは犬を引き紐から自由に開放することは禁じられている(“Dogs must be on a short lead at all times.”)また、このような掲示板も見かけた。オックスフォード大学の英文科の図書館の近くに、ホリウエル・セメタリという共同墓地がある。ここには、言語学者のマックス・ミュラー(1823-1900)と、芸術至上主義を唱えた批評家のウォルター・ペイター(1839-94)が静かに眠っている。墓地内でこれら偉人の墓がどこにあるかを示した掲示板を見ていたら、ここにも墓地の自然に関する記述があった。このように書いてある。

The burials include many eminent academics, writers and local business and professional people. The Friends of Holywell Cemetery was formed in 1987 to raise fund for maintenance and BBOWT was consulted for advice on keeping this beautiful area compatible with its interesting wildlife whilst at the same time keeping the graveyard tended. In order to prevent the eviction of the wood mice, foxes, pheasants, frogs, toads, numerous butterflies, dragonflies and birds which live and feed here, a rotation system of clearance has been established enabling a variety of habitats to be perpetuated yet preventing any area from becoming completely overgrown. Close mowing is avoided, apart from the paths, allowing spring and summer meadow flowers to carpet the ground. Shrubs and conifers provide nest sites as well as fruit and seeds for birds.

“Close mowing is avoided.”であったために、ミユラーとペイターの墓石を見つけるのは苦勞した。しかし兩人とも、上記の趣旨には賛成することだろう。これと似た趣旨のことが呼びかけられているのを、オックスフォードで出されているローカル新聞の中でも知った。雪の積もった小枝に止まっているロビンの写真が目に入って来たからである。その記事は次のように書かれてあった。「これから冬となって冷え込みが強くなり、小鳥たちにとっては厳しい季節です。庭の餌台をきれいにし、鳥たちに与える餌を欠かさないようにしましょう」これだけなら何も特別なことはない。しかし、これに続く次の記述に面白さを感じた。「庭には小枝や落ち葉が落ちていることでしょう。でも、これらを片付けないようにしましょう。小動物や小鳥にとっては、小枝や落ち葉が敷き詰められた庭は、虫をついばむ格好の場所だからです」先日、目に余って庭の小枝類をきれいに片付けたばかりだったので、なおさらこの内容に考えるところがあった。

身近なところに思いがけない自然がある。今日もまた庭にキツネが出て来ないかと期待しながら、大木を眺めている。(2003年10月)